

「明治の外交」 条約改正と日英同盟

平成13年7月24日・袖ヶ浦公民館

この現代史講座を始めてから七年半になります。すでに三十回の講座を終わっています。途中からお聞きになった方も多いので、きょうは第一回に戻って、いわば明治日本の出発点について、「明治の外交」と云うテーマで不平等条約改正と日英同盟を中心に話してみたいと思います。

私が新聞記者をしていたころ、作家の司馬遼太郎さんを講演にお招きして、その後何度か一緒にお酒を飲む機会がありました。司馬さんは大変な座談の名手で、いつまで話していても飽きないといった楽しいお酒でしたが、その時印象に残っている話があります。司馬さんご自身、本に書いていらつしやるのでお読みになった方も多いと思いますが、司馬さんは終戦直前、戦車師団の将校として栃木県の佐野市にいました。米軍の本土上陸に備えた日本陸軍虎の子の決戦師団ですが、作戦指導にきた大本営の参謀に質問が出ました。米軍が上陸してくれば、当然主な道路は避難民で埋まってしまう。戦車が上陸地点に駆け付けるのに障害になるが、どうすればいいかと。するとその参謀は、即座に「ひき殺していく」と答えたと云うのです。日本人のために戦っている日本の軍隊が、味方をひき殺す。一体どこからそんな論理が生まれてくるのか。

「坂の上の雲」をはじめ、司馬さんの数多くの著作は、この疑問から始まっていると思うのですが、実は長年新聞記者をしてきた私が、いつも自分に問い続けてきたのも、日露戦争に勝利した日本が、なぜわずか四十年の間にあの太平洋戦争を始め、敗戦の運命を迎えなければならなかったのか。この点でした。日露戦争の頃の日本のリーダーは、世界の中の日本の弱い立場をよく知っていました。現実認識にも優れていました。それが一体どこから狂ったのか。日露戦争がその分岐点だったとすれば、なぜそうなったのか。自分なりにもう一回現代史を洗い直して、皆さんと一緒に考えてみたい。これが歴史の専門家でもない私が、この講座を始めた動機でした。

さて、明治とはどんな時代だったのでしょうか。一言で言えば、近代国家として誕生したばかりのひ弱な日本を、外国の侵略からどうやって守るか。また幕末のどさくさに結ばされた不平等条約を、どうやって改正するか。この二つの国家目標に苦闘した時代でした。きょうの話の主人公である陸奥宗光と小村寿太郎の二人が、日本の外交の第一人者として名前を残すのも、この明治国家最大の国家目標を解決したからなのです。

明治十九年、一八八六年という年は、「第二の黒船」ともいうべき、二つの事件が起きた年でした。一つは八月の長崎事件です。丁汝昌提督率いる清国の北洋艦隊が長崎に入港したのですが、朝鮮半島をめぐる日清の対立が深まっている時です。表向きは親善訪問でも、実際は日本に対する清国海軍のデモンストレーションでした。何しろ定遠、鎮遠は七千四百ト、四門の十二吋砲を備えた世界最大の鉄鋼艦です。その頃の日本の軍艦は二、三千トがやっと。まあ鉄骨木造艦みtainなもので、大砲の口径も半分の六吋砲しかありません。軍艦の大砲にしても盾一枚で敵弾を防いでいたのに、定遠、鎮遠は砲塔と云って、大砲を厚さ十四吋の鉄鋼で囲ってあります。それを自由自在にグルグル動かして発砲するのですから、初めて見た日本の海軍士官は、「神業のように思えた」と云っています。ですから、海軍の軍人をからかって、「君、定遠に勝てるかね」が流行り言葉になったそうです。

事件は、酒に酔った清国水兵が丸山遊廓で暴れ、日本の警察に捕まったことから始まりました。その水兵を奪い返そうと清国水兵四百人が長崎警察署を襲撃、斬り合いになって八十人余りの死傷者を出したのです。市内のあちこちで乱暴狼藉しても、力では敵いませんから、ひたすら低姿勢です。「警官にサーベルを持たせるな」。こんな屈辱的な要求まで呑んで、一日も早い清国艦隊の出港を願ったと云います。定遠、鎮遠の脅威を現実に見せ付けられ、明治維新以来初めて、国民の関心を国の安全に向けさせた事件でした。

明治政府も慌てて国防強化のため、千七百万円の海軍公債を募集しました。当時の海軍予算が四百九十万円だったと云いますから、三倍半のお金を国民の愛国心に訴えたわけですが、長崎での屈辱が引き金になり、国民は争うようにして応募したのです。このお金で日本三景から名前をとった松島、橋立、厳島の三隻の軍艦を造りましたが、定遠、鎮遠に対抗するには、さらに速射砲を備えた快速艦が必要でした。明治天皇が三十万円の建艦費用を寄付されると、国民はせいぜい三円、五円といった乏しい財布の中から、身を削るようにして二十銭、五十銭と献金しました。当時の新聞を見ますと、連日のように一段、二段の紙面を割いて寄付者の名前が掲載されていますが、二百三万円も集まったそうです。戦前日本が世界に誇った連合艦隊の土台は、まさにこの長崎事件がスタートだったのです。

もう一つは十月、イギリスの貨物船ノルマントン号が嵐の紀伊半島沖で遭難沈没した事件です。船長以下イギリス人船員はボートで脱出したのに、船倉にいた日本人乗客は二十三人全員が水死しました。「日本人は見殺しにされた」と国民は怒りましたが、当時の日本には裁判権がありません。神戸で開かれたイギリス領事の裁判で、「ドレーク船長は無罪です。新聞各紙が「外人は日本人乗客を処すること荷物の如し」とキャンペーンを張り、轟々たる世論に押された内務省が、船長を殺人罪で告訴したのですが、横浜の領事裁判でも禁固三か月でした。国民

は改めて不平等条約の理不尽さ、国際社会ではまだまだ二流国民として扱われている悲哀を痛感したのです。

何でこんなことになったのでしょうか。ペリーの黒船が浦賀にやってきたのは嘉永六年、一八五三年です。「蒸気船たった四杯で夜も眠れず」。こう歌われたように、長い鎖国で幕府には外交知識がありませんから、何をどうしたらいいのか、さっぱり分からないというのが実情でした。幕府の政治機構というのは、専ら大名や民衆を治めるために作られていて、外国相手には人材も育てていなかったし、全く役に立たなかつたのです。軍艦外交の嚇しに、アメリカ大統領の親書だけは受け取ったものの、翌年再び現われたペリーの言いなりでした。和親条約に続いて安政五年に日米修交通商条約。そしてイギリス、フランス、オランダ、ロシアとの間に、いわゆる「安政の五条約」が結ばれましたが、その内容たるや、帝国主義時代の悪どさの見本のようなものでした。

まず第一に、日本の関税は一律五％に抑えられました。明治になってとうとうと流れこんでくる外国製品に、関税を高くしたいと思っても出来ないのです。ただでさえ貧弱な新政府の財政には、大変な痛手です。ところが外国は、自分の国の産業保護に高い関税をかけています。一番低いといわれたイギリスでさえ一〇％以上です。日本の歳入に占める関税収入の割合はたった四％なのに、イギリスは二六％。不平等を絵に描いたような貿易条件でした。

第二の問題は、ノルマントン号事件でもお分かりのように、日本にいる外国人が犯罪を犯しても、日本には裁判権がなかつたことです。外国人はその国の領事が裁判をする治外法権でした。今の常識で考えれば何ともひどい話ですが、幕末から明治の頃の価値観は違うのです。産業革命によって技術国家、文明国家となつた欧米諸国は、新たな資源と市場を求めて、アジア、アフリカに侵略の手を延ばしてきました。文明を物差しにして、自分たちより劣っている国、野蛮な国を植民地にし、奴隷同様に扱うのは当然のことでした。戦争も領土拡張も、愛国的な行為だつたのです。

明治のリーダーたちが外国へ行ってショックを受けたのは、白人に支配されている植民地の姿でした。慶応義塾を開いた福沢諭吉、「封建制度は親の仇でござる」と云つて、古い習慣の打破、自主独立を訴えた文明開化の先覚者・福沢は文久元年、今から百四十年前に幕府の一員としてヨーロッパへ渡っています。その途中の香港で福沢が見たのが、イギリス商人に鞭で叩かれ、酷使される中国人だつたのです。「今のままでは日本もこうなる。そうならないためには、欧米から学んで強くならなければならぬ」と、有名な「西洋事情」という本を書いたのです。そして「学問のすゝめ」で漢学や国学ではなく、地理、歴史、物理、経済といった日常役に立つ学問を身につけよと説いたのも、人間一人一人が独立して家も独立し、天下国家も独立するという考えからでした。

二年遅れて文久三年、イギリスに密航した長州藩の伊藤博文が上海で目にしたのは、港にひしめく欧米の蒸気船でした。一緒に行つた井上馨が悲鳴をあげたそうです。「こんなに船がいる。日本に向かつてこられたら、一たまりもない」。品川のイギリス公使館に焼き打ちをかけたほどのバリバリの攘夷論者が、ロンドンに着いた時には、「攘夷なんてとんでもない話だ」と、コロリと変わつていました。イギリスの議会、軍隊、工場を見て、この時の見聞が伊藤の人生観を一変させたと言います。四回も総理大臣を務め、元老として明治の日本を引っ張つた伊藤ですが、「弱腰だ」、「八方美人だ」といわれながら、頑固なまでに現実主義、穩健主義の道をとリ続けたのです。

慶応四年一月、十五歳の明治天皇を擁した薩長連合軍は、鳥羽伏見の戦いに勝つと一週間後には、あつさり攘夷の旗印を捨てて開国に踏み切つていきます。この電光石火のような政策転換をさせたのが、実は弱冠二十四歳の陸奥宗光だったのです。陸奥は鳥羽伏見の勝利を見届けると、すぐ大阪に飛んでイギリス公使パークスに会い、新政府の外交をどうしたらいいか、意見を求めました。パークスが強調したのは、日本の主権者が天皇か徳川將軍家かということは、外国の公使にきちんと通告手続きを取り、国際承認を得て初めて決まる。つまり外国の承認を急げということでした。

当時の日本で、こんな知識を持つている人はいません。薩長出身でもない陸奥が、認められていく上で大変な武器でした。「大阪にいる各国公使に王政復古、天皇に政権が戻つたことを通知し、維新の政策を明らかにすべきだ」。陸奥の出した意見書が新政府の実力者・岩倉具視に採用され、陸奥は外国事務局御用掛、外国担当になつたのです。そして、ここで伊藤博文と机を並べたことで、伊藤との生涯の付き合いが始まりました。薩長閥が大嫌いだつた陸奥ですが、伊藤にだけは一目置いていたと云います。伊藤もまた陸奥のことを、「あらゆる場面に、何か解決策を持つている男だ」と高く買つていました。この二人の信頼関係が、やがて条約改正を成功させることになるのです。

陸奥は徳川御三家・紀州藩家老の伊達宗広の子供です。十歳の時、父親が藩内の権力闘争に巻き込まれ、和歌山県の田辺に十年間の流罪となりました。この少年時代の一家離散の辛い体験が、陸奥の意志の強さ、反骨精神を育てたようです。陸奥宗光は本名ではありません。伊達家が陸奥の国伊達郡出身だということで「一郡の主より一国の主たらん」。この気概を示すため、陸奥を名乗るようになったのだそうです。陸奥の父親は脱藩して京都で尊皇攘夷運動に走り、その縁で陸奥は土佐の坂本竜馬に可愛がられました。竜馬の海援隊に入った陸奥は、長崎で外人宣教師の家にボーイとして住み込み、その奥さんから英語を習つたのです。この長崎での外人づきあいが、鳥羽伏見の戦いの後、すぐパークスを訪ねる機転に生かされたわけですが、生来機を見るのに敏だつたのでしょう。

陸奥も父親同様、流罪生活を送っています。明治十年の西南戦争の際、土佐の同志が立てた反乱計画に連座し、禁固五年の刑を受けて山形監獄に送られたのです。明治の人には、惚れ込んだら命懸けと云うのか、何か損得を離れた人間付き合いにびっくりさせられることがあります。陸奥の生涯のパトロンとなつたのは古河財閥の古河市兵衛です。古河が幕末の豪商小野組の大番頭をしていた時に、金繰りに困つた新政府が、三井や小野組に貸し付けてある公金を一斉に引き揚げようとしたことがあります。豪商たちはこの金で商売をし、政府にももうけさせているわけですから、手元から金が出払っているのが普通です。それを一辺に引き揚げられたら倒産します。古河は大蔵省の役人をして陸奥に陳情して猶予してもらつたのですが、後日お礼を持っていくと陸奥に叱られました。陸奥は「公金を引き揚げれば、全国の経済が混乱するから止めたままで、小野組のためではない。不心得なことをするな」と、礼を受け取りません。古河はすっかり陸奥に惚れ込んでしまい、崇拜者となつただけではなく、自分には実子が大勢いるのに、陸奥の次男潤吉を養子にして、古河家二代目の後継ぎとしたのです。

山形に「後藤又兵衛」という、ちよつと変わった名前のお舗旅館がありました。私も山形支局長をしていた時、東京からお客さんがやつて来ると必ずこの旅館に泊めたものでしたが、ホテルなど近代化の波に勝てず、四年ほど前に廃業しました。実は山形監獄に送られた陸奥の命綱となつたのが、その又兵衛旅館の当主だったのです。小野組は着物などを染める染料を一手に扱っていましたから、番頭の又兵衛は山形で紅花を仕入れるため、旅館を開いて集荷基地にしました。陸奥は薩摩に憎まれていたこともあつて、毒殺を恐れて監獄の食事には一切箸をつけません。古河市兵衛の指示で、陸奥の三度三度の食事を一日も欠かさずに差し入れたのが、その又兵衛だったのです。

古河と云う人はまるつきり読み書きの出来ない人で、財界の大御所渋沢栄一は「無学の偉人」と云つたそうですが、これから先どうなるかも分からない罪人の陸奥に尽くすあたり、古河が只者でなかつたことが分かります。獄中の陸奥は、朝八時から夜十二時まで、ひたすら読書に励みました。イギリスの思想家ベンサムの「功利論」を翻訳したのも獄中なら、「剃刀大臣」と云われた陸奥の鋭い分析力が磨かれたのも、この獄中だったと云われています。

陸奥が第二次伊藤博文内閣の外務大臣になつたのは、明治二十五年八月のことです。閣僚に山県有朋、黒田清隆、井上馨、大山巖と維新の元勳を揃えたので、「元勳内閣」と云われましたが、伊藤と陸奥は悲願の条約改正を執行する腹でした。憲法を作り国会も開設した。近代国家の体制を整えた今こそ、その時だと思つたのです。しかし簡単にはいきません。条約改正交渉の歴史は、失敗の連続だったのです。明治四年に欧米視察に出た岩倉使節団が、真つ先にアメリカを訪問したのも条約改正が目的でした。安政五年の通商条約に「百七十一か月後、つま

り明治五年になれば改正交渉が出来る」とあつたからです。しかしアメリカが自分の国が損になる条約改正を、そうやすやすと呑むはずがありません。国際法、外交知識の不足もあつて、失敗しました。

明治十二年から八年間も外務卿、外務大臣を務めた井上馨が、世に有名な「鹿鳴館時代」を開いたのも、条約改正をしたい一心からでした。鹿鳴館では連日のように外国人名士を招いて、華やかな舞踏会が開かれました。日本も欧米なみの文明国家になつたことを、見てもらおうというわけです。二十年四月の仮装舞踏会では、伊藤がベネチアの貴族なら、山県は奇兵隊の兵隊姿、井上が三河万歳。浦島太郎に扮した大倉財閥の大倉喜八郎が、「実に奇妙な時代だつた」と回想しているように、涙ぐましいような努力でした。こうしたヨーロッパ一辺倒の「欧化主義」には、当然反発が出てきます。維新後二十年もたつと、日本が進めてきた開化とは一体何なのだと、改めて問い直す議論も出てきます。国粹主義、国権主義です。外国の方も、「まだ日本人に裁判は任せられない」と冷たく、井上は各国公使に条約改正交渉の無期限延期を通告、外務大臣を辞職したのです。

「内地雑居」という余り聞きなれない言葉が、明治の新聞を賑わせたのもこの頃の話です。安政の開国で東京、神戸、横浜、長崎などに外国人のための居留地を設けましたが、外国人は居留地以外では居住も商売も、自由な旅行も認められていません。ところが条約改正というのは、居留地をなくして治外法権を撤廃させる代わりに、外人の居住も商売も日本人と一緒にさせる、雑居させると云うことなのです。安政の開国が外国に門戸を開いた、日本の玄関を開いたとするなら、条約改正と云うのは座敷から台所まで開放してしまう、「第二の開国」でした。しかし一般民衆の間には、外人に対する警戒心、何となく薄気味悪いといった感情が、まだまだ強い頃です。これが「不平等はけしからんが、外人は今まで通り居留地に押し込めておいた方がよい」という声になつたのです。

第二代黒田清隆内閣の外務大臣になつた大隈重信が、治外法権撤廃の代償として考えたのが、大審院判事、今の最高裁判事に外国人を起用することでした。こうすれば、外国も日本の裁判を信用するだろうと云うわけです。ところが秘密交渉でドイツ、ロシアの同意を取り付けたところで、この改正案がロンドン・タイムズに素つ破抜かれてしまい、国内は「屈辱的だ」、「主権侵害だ」と、騒然たる騒ぎになつたのです。もしこの時外国人判事を起用していたら、一度認めた既得権をとつばらうのは大変だつたでしょうね。タイムズに改正案を流したのは、外務省切つてのタカ派小村寿太郎だつたと云われます。

内閣の中にも反対が出てきました。農商務大臣の井上馨は大隈嫌いのせいか、あるいは条約改正の手柄を大隈に奪われるのがいやだつたのか、郷里の山口に帰つてしまいました。気に入らないことがあると、どこかへ行ってしまうのは井上の特技だつたそうで、不機嫌の度合いは距離に比例すると云われました。やがて

伊藤、山県の長州閥が反対に回り、閣内が大きく反対に傾いた時、一発の爆弾が大隈を襲ったのです。福岡の国家主義団体・玄洋社の三十歳の青年・来島恒喜の投げた爆弾が、馬車に乗っていた大隈の右足と共に、改正案を吹き飛ばしてしまつたのです。明治二十二年十月十八日のことです。来島はその場で短刀でノドを突いて自決しましたが、黒田内閣は総辞職しました。酒に酔つた黒田が「国賊を殺しにきた」と、日本刀で井上邸に殴り込んだもこの時の話です。

こうした中で外務大臣になつた陸奥は、たとえどんなに改正交渉が難しくても完全な平等条約でいこうと決意していました。実は陸奥は二十一年の駐米公使時代に、その足がかりを作つていたのです。「最惠国待遇」という言葉があります。どこかの国に日本が良い条件を与えれば、自動的に同じ良い条件をもらえる権利があるということです。安政の五条約には、皆この「最惠国条項」がついていました。ところが駐米公使の陸奥がメキシコと条約を結んだ時、「最惠国待遇」に条件をつけたのです。この条約ではメキシコ人に内地雑居、つまりメキシコ人が日本国内どこでも居住、商売、旅行してよい自由を与えました。ただしそれは、メキシコが領事裁判権を完全に放棄したからだ。他の国もそうするなら、メキシコと同じ待遇を与えると云うのです。イギリスは「最惠国待遇は無条件のはずだから、メキシコ同様内地雑居を認めろ」と要求してきましたが、日本は譲りませんでした。そして陸奥は、この「内地雑居」を武器にして、国ごとに個別交渉すると云う突破口を開いたのです。

陸奥は、交渉相手をイギリスに絞りました。世界一の大帝国イギリスさえ攻略すれば、後は問題ない。風になびくように、イギリスに従うだろうと読んだのです。事実その通りになるのですが、思いもかけない伏兵が議会に待ち構えています。現在の条約を守れと云う、建議案が議会上程されたのです。安政の条約は建前としては、居留地以外の外国人の行動を制限しています。しかしそれでは不便だと云うので、営業活動などは特別に許可証を出して認めていました。それを条約通り厳しく励行させ、一切制限しろと云うのです。そうすれば外国も現在の条約の不利を覚り、改正に応ずるだろうと云うのですが、もちろん本音は雑居反対であり、条約改正案を潰してしまおうということでした。

陸奥は不退転の決意を示しました。「内地雑居反対は、排外主義にほかならない。それは維新以来の国是である開国主義に反する」と政府の態度をハッキリさせ、まず議会を停会。それでも応じないとみるや、伊藤内閣は解散に次ぐ解散を断行して、日英新通商条約調印に漕ぎ着けたのです。日清戦争が始まる直前、明治二十七年七月のことでした。新条約は批准後五年で発効し、治外法権は三十二年に撤廃されました。しかし条約改正のもう一つの柱である、関税自主権を回復するには、日露戦争が終わつてから六年も後、日本が一等国として世界に認められた明治四十四年まで待たなければならなかつたのです。これを見ても条約改正

がいかに大変だったか、お分かり頂けると思います。

ところで日清戦争と云うのは、朝鮮半島での日清両国の主導権争いから起こったものでした。明治の日本は富国強兵を国策に、いち早く近代化して、外国の侵略から日本を守ろうとしました。その際日本の防波堤になつてほしかつたのが朝鮮半島です。ちょうど日本の喉元に突き付けられた短刀のようなもので、朝鮮がどこかの属国になつてしまえば、日本は常に侵略勢力に脅かされることになりません。こうして朝鮮の宗主権を主張する清国、つまり韓国は属国だという清との間に日清戦争が始まりましたが、日本の連戦連勝で二十八年四月、下関で清の実力者李鴻章を迎えて講和条約が調印されました。旅順のある遼東半島や台湾を日本に譲り渡すこと、韓国の独立承認、賠償金三億円の支払いが主なものでしたが、一週間も経たないうちにロシア、ドイツ、フランスから横槍が入つたのです。日本が遼東半島を持つのは、極東平和のためにならない。清の首都である北京に近すぎるし、韓国の独立もおかしくなるから、清国に返せと云うのです。世に云う三国干渉です。断れば戦争になります。

当時のロシアがどのくらい大国だったか。日本に比べて面積で五十倍、人口で三倍、常備軍、普段の軍隊の人員も五倍で、国家予算に至つては十倍です。大きな戦艦をロシアは二十八隻も持っているのに、日本には一隻もありません。日清戦争に勝つたとはいえ、日本はまだまだ二流国、とても喧嘩にならないのです。

四年前の二十四年五月、ロシア皇帝ニコライ二世がまだ皇太子の時です。日本を訪問して琵琶湖見物の帰り、大津市内で警護の巡查津田三蔵にサーベルで斬られる事件がありました。大津事件です。頭に軽い傷を負つただけでしたが、今にもロシアが攻めてくるのじゃないか、対馬や千島が取られるのじゃないかと、日本中が震えあがりました。明治天皇は京都に見舞いにかけて、皇太子に付き添つて神戸港のロシア軍艦まで送り届けました。天皇が体を張つて護衛役を果たされたのですが、お詫びに短刀で喉を突いて自殺した女性もいました。千葉県鴨川の二十七歳の女性だったそうです。青森では生まれてくる子供に、三蔵という名前をつけてはいけなないと決議した村議会もありました。それほどロシアは怖い国だったのです。

そのロシアから横槍が入つたのですから大変でした。御前会議ではイギリスなどを入れて列国会議を開き、調停して貰つたらどうかという案が出ました。「イギリスはドン・キホーテに非ず」と反対したのが、結核で病床にあつた陸奥宗光です。イギリスはドン・キホーテのような、お人好しの理想主義者ではないと云うのです。そんな列国会議を開けば、てんでに自分の国の利害を主張して収拾がつかなくなり、講和条約自体が壊れてしまう。ここは三国の云うことを聞いて、講和条約の批准を急げと云うのです。実に見事な国際認識ですが、陸奥の意見が通つて日本は遼東半島を清に返しました。後に「平民宰相」といわれた原敬は、

陸奥の秘書官を務めて認められた人ですが、何か難しい問題にぶつかるたびに、「陸奥ならどう処理したろうか」。こう考えて行動したと云います。

それにしてもロシアという国は、あんな大国でありながら、北のバルト海にか海の出口がありません。貿易、経済を考えれば、「海へ出たい、南へ出たい」と云うのは、ロシア建国以来の悲願でした。ペリーの黒船が日本にやってきた頃、ロシアは黒海から地中海に出ようとして、イギリス、フランスと戦って敗れました。ナイチンゲールが活躍したクリミア戦争です。これで西への出口を止められたロシアは、勢い東へ東へと太平洋に海の出口を求めるようになったのです。明治六年には黒竜江を下った所に、海軍基地ウラジオストックを建設しました。ウラジオストックというのは、「東を支配する」という意味なのだそうですが、極東支配に必要なヨーロッパ大陸への連絡路となると、黒竜江の水路しかありません。そこでシベリア鉄道建設という壮大な事業に着手したのですが、因果なことに肝心の太平洋への出口は、全て日本に押さえられています。宗谷海峡、津軽海峡、対馬海峡のどれかを通らないと、太平洋には出られないのです。ですからロシアの要求は、常に対馬海峡の自由航行でしたし、その実現に向けて着々と手を打っていたのです。

ウラジオストックは冬になると凍りますが、遼東半島には旅順という不凍港があります。しかも旅順からは太平洋へ自由に出ていけます。むざむざ日本に渡すことはないと考えたのが、ロシア政界切つての実力者、シベリア鉄道建設の推進者である大蔵大臣のウイッテです。ウイッテはやがてポーツマス講和会議で小村寿太郎と渡り合ったように、大変な策略家であり、朝鮮進出も考えていた積極論者でした。ウイッテの腹は、日本に圧力をかけて遼東半島を清に返させ、清に恩を売ることです。云うことを聞かなければ、艦隊を送って日本の港を砲撃する。武力を背景にした威嚇外交ですが、この計画を聞いた外務大臣のロバノフが心配になったのです。

ロシアは東へ出るのに、後ろのドイツが気になります。そこでドイツを挟む形でフランスとの同盟、露仏同盟を結んでいました。ドイツはドイツで、ロシアが東に一生懸命なのは大賛成です。その間、西のフランスの動きに気をつけなければよい。フランスはどうかというと、ロシアとの同盟でドイツを牽制しておけば、海の向こうのイギリスを警戒すればよいと云うわけです。この間イギリスは七つの海を支配し、世界一の海軍力を誇っていましたから、どことも同盟せず、名誉ある孤立政策を取っていました。

ロバノフが何を心配したのかというと、極東でロシアの進出に神経を尖らせているイギリスの動きです。万一、イギリスが日本についたらどうするか。ロバノフは保険をかける意味で、同盟国フランスに声をかけました。ところがフランスも、うっかりこの話に乗ってイギリスに出られたら、ドイツが気になります。そ

こで「ドイツも乗るなら」と条件をつけ、ウイッテの思惑とは大きくずれた形で三国干渉となつたのです。

司馬遼太郎さんは「坂の上の雲」で、「日本の悲痛さは、このケタ外れの大国であるロシアを、敵として仮想せねばならないことであつた」と書いています。遼東半島返還に、大人も子供も、男も女も、日本中が泣いて悔しがりました。三宅雪嶺が雑誌「太陽」で唱えた「臥薪嘗胆」が、国民の合い言葉になりました。古代中国春秋の頃、越王勾踐に父を殺された呉王の夫差が、薪の上に寝て復讐の心を奮い立たせ、その夫差に敗れた勾踐が今度は肝をなめ、その苦さで敗戦の恥を忘れないようにしたという話です。日清戦争中の二十八年の国の歳出が九千万円です。翌年は戦争も終わって、普通なら国力を休めるところですが、歳出は二倍以上の二億円。しかも軍事費が増えています。陸軍は師団を増やし、海軍は軍艦を造る。国民は増税に次ぐ増税に歯を食いしばり、国を挙げての「臥薪嘗胆」が始まつたのです。

ところで日清戦争の結果は、極東のバランスを一変させてしまいました。大国清の実力のほどが、世界中に分かつてしまつたのです。列強の凄まじいばかりの中国侵略が始まりました。二十九年五月、皇帝ニコライ二世の戴冠式に清の李鴻章がやってくる、遼東半島を返してやって恩を売つたウイッテは、露清密約を結びました。日本に対する軍事同盟をエサに、北満州を通る東清鉄道の敷設権を獲得したのです。黒竜江沿いのシベリア鉄道は、川が大きく曲がりくねっていますから、建設に時間がかかります。ところが北満州を通れば、ウラジオストクまでほぼ一直線です。こうしてロシアはまず、満州へ出る足場を築いたのです。

年表の明治三十一年をご覧になつて頂くと、侵略がどんなにひどかつたか一目瞭然です。ロシアの遼東半島以外はみんな、百年から申し訳に一年引いた九十九年間租借です。イギリスの九竜半島は、香港と一緒に四年前やつと中国に返つてきましたが、ロシアの遼東半島が二十五年と短いのは、決してロシアが良心的だつたからではありません。ドイツが膠州湾を占領すると、清は同盟を結んでいるロシアに泣き付きました。するとロシアは、「ドイツから守つてやる」という口実で艦隊を旅順に送り、そのまま占領してしまつたのです。清国の嚴重抗議に、ウイッテは李鴻章などに七十五万ルーブルの賄賂を贈り、旅順租借を無理矢理承知させました。租借期間が短いのは、さすがに良心が咎めたのでしよう。日本が遼東半島を返してから、わずか三年たらずの出来事です。

まあ後の話になつての話ですが、この時ロシアが臆面もなく九十九年にしてくれられたら、その後の極東情勢は大きく変わつていたかも知れませんね。日本は日露戦争で、ロシアが南満州に持つていた權益をそのまま譲り受けましたから、九十九年もあつたら、あんなに露骨に中国に介入することもなかつたし、もつとゆつくり満州経営に当たつていたと思うのです。

それはともかくとして、こんな列強の侵略が続けば、中国に義和団事件という「扶清滅洋」、清国を助けて西洋を撲滅しよう」をスローガンにした攘夷運動が起こつたのもうなすけません。ところがロシアは、この暴徒鎮圧を名目に大軍を満州に送り込み、そのまま居座つてしまつたのです。名目さえつけば何でもする。いわば放火犯人のロシアが火事場泥棒までしたわけですが、これが日露戦争直前の極東の情勢でした。

X

X

日露戦争というのは綱渡りの連続、まさに九死に一生の戦いでした。完璧な勝利と云えるのは日本海海戦くらいのもので、後は奉天の戦いにしても、どっちが勝つたか分からないうちに、相手の方が退却しいつてくれた。軍事面が際どい勝利の連続なら、財政、お金の面でもピンチの連続で、「よくぞ勝てた」というのが実感です。しかも日清戦争から日露戦争にかけての十年間は、世界列強によるアジア侵略の真つ只中でした。いわばギリギリの正念場に立たされた日本が、そうした大波に飲み込まれず、概ね正しい進路を取ることが出来たのは何故だったのでしょうか。それは見事なくらいに、適所に適材を得たこと。しかもその人たちが日本の力の程をよく知り、現実認識がしっかりしていたことに尽きると思います。それが外交的には、日英同盟という最高の切り札を握ることにつながりました。明治三十五年一月、来年でちょうど百年になります。時の外務大臣小村寿太郎がイギリスとの間に結んだ日英同盟は、この同盟がなければ、日露戦争の勝利はとても覚束なかつたのです。

ロシアが満州まで出てくると、日本の取るべき道は二つしかありません。ロシアと組むか、それともロシアの極東進出に神経を尖らせているイギリスと組むかです。元老の伊藤博文や井上馨は一路南下してくるロシアと手を握ることで、その圧迫から逃れようとしてました。ロシアと妥協し、その要求もある程度は入れる。しかし日本の防衛線である朝鮮に関しては、日本の要求も呑んで貰う。そうしてしばらく時を稼いでいるうちに、また出方もあるだろう。イギリスは世界の大帝国内で、それが極東の小国日本と同盟を結ぶなんてことは考えられない。あり得ないものを夢見たところで仕方がない。これが伊藤や井上の考えでした。

一方、ロシアをご都合主義の国と見る人たちがいました。ロシアという国は、自分が有利になる時は約束でも何でもするが、都合が悪くなると簡単に蹴飛ばしてしまふ。しかも土地を巻き上げる。シベリアのような不毛の土地でさえ奪い取り、満州から蒙古の線も押さえってしまった。幕末の話ですが、ロシアの軍艦が対馬に居座り、危うく占領されそうになったことがあります。この時はイギリスの東洋艦隊が追い払ってくれましたが、現に朝鮮でも陸戦隊をソウルに送ってロシア寄りの内閣を作らせ、朝鮮の南岸、対馬と目と鼻の先の土地を借り上げて、対馬海峡を抑えようとしている。この侵略癖は油断ならないと云うのです。イギリ

スは自己本位で、利益にならないことには見向きもしないが、一度約束したことはきちんと実行している。国と国の関係でも、GIVE AND TAKEである。日本が何を与えるか、GIVEが問題だが、イギリスとの同盟を頭に描いていたのが、元老の山県有朋であり、やがて総理大臣になる桂太郎でした。

実はこの日英同盟を持ちかけたのは、当事国の日本でもイギリスでもなく、ドイツだったのです。この辺が外交の面白いところですが、明治三十四年三月のことです。イギリス公使館の松井慶四郎一等書記官がクラブで一杯飲んでいて、ドイツの代理公使エツカルトシュタインが寄ってきて、「イギリスは日本との同盟を考えている。日本が賛成なら、ドイツも参加してもよいが」と声をかけたのです。エツカルトシュタインはドイツ皇帝ウイヘルム二世のお気に入り、奥さんがイギリスの実力者の令嬢ですから、イギリス政界にも通じた外交官です。

その翌日、日本の林董公使を訪ねてきたエツカルトシュタインは、「イギリス閣僚の実力者にも当たってみたが、日本が提唱すればイギリスも同意するに違いない」と云うのです。林公使は早速外務大臣加藤高明に報告しましたが、時の内閣は、ロシアとの協調を模索している第四次伊藤内閣です。加藤外相の返事は、「しばらくは林個人の資格で、イギリス政府の意向を打診せよ」。当たり障りがない、どちらかといえば消極的なものでしたが、とにかく思いもかけない形で日英交渉は動き出すことになったのです。

林公使がイギリス外務省を訪ねると、ランズダウン外相も「イギリスとしても同盟の必要は認める」と云います。ただしドイツを入れてはどうか、と云うのです。もともとがドイツの口利きで始まったことですから、林としても異存ありません。ところが不思議なことに、打診を重ねるうちにイギリスはドイツのことは忘れてしまったように、何も云わなくなつたのです。ドイツの魂胆は一体何だったのか。ウイヘルム二世の回顧録や、後に外相となる石井菊次郎の書いた「外交余録」から判断すると、ドイツの狙いは「ロシアと日本を戦争させ、それでドイツの安全を高める」ことだったようです。この年、つまり明治三十四年一月ですが、イギリスにヴィクトリア時代を築いたヴィクトリア女王が亡くなりました。外孫に当たるウイヘルム二世も葬儀に参列しましたが、その際盛んに英独提携を強調しました。エツカルトシュタインは、そのドイツ皇帝の意向を受けて動いたのです。

ドイツの立場は、世界一の陸軍大国であるロシアの力を弱め、対立するフランスを孤立させることです。それにはロシアの大軍を遠い極東に釘づけ出来るように、極東でロシアと事を構える国を造らなければなりません。それは日本をおいて外にないが、日本単独ではとても無理だろうから、日本をその気にさせる同盟国が必要です。それにはイギリスが最高だが、イギリスは孤立政策を取っていません。まして抵抗感の強い黄色人種の日本と組ませるとなると、ドイツも進んでこ

の同盟に参加する素振りを見せる。といつて本当にこの同盟に加わったのでは、今度はロシアがドイツを警戒して東へ行くのをやめてしまう。だから最初のうちだけドイツも熱心なように見せかけておいて、話が進んだところでドイツは御免蒙ると云うのです。

何とも複雑な、策略に満ちた国際政治の舞台裏ですが、たとえドイツの腹がそうだったにしろ、イギリスがこの話に乗ったのは何故でしょう。最大の理由は、明治三十二年の秋、南アフリカで始まったボーア戦争だったのです。イギリスはオランダ系移民であるボーア人との植民地戦争にてこずっていた、とても極東に手が回りません。ですからエツカルトシユタインの話聞いた植民地担当の大臣チエムバレンは、ロシアの極東進出を牽制するには英独同盟がよいと、早速ドイツ皇帝と交渉を始めました。ウイルヘルム二世の思惑通りです。そしてイギリスが乗り気になったところで、ドイツは予定どおり「もしドイツがイギリスと組めば、ロシアとフランスの挟み撃ちにあう」と云って、断ってきたのです。

こうして七月三十一日、ランズダウン外相は林公使を招くと、ドイツに断られたことはおくびにも出さず、「日本と同盟交渉をしたかったので、日本政府に取り次いでほしい」と正式に申し入れてきました。第一に、中国の領土保全の原則を維持し、将来その分割を防止すること。第二に、日本が韓国に優越な利害関係を持っている事実を鑑み、イギリスは日本が韓国での自由行動を認める。第三に、日本もしくはイギリスがどこかと戦争になった場合は、同盟国の一方は厳正中立を守り、もし第三国が敵国に加担した時は、武力で味方を援助する。こういった内容でした。

ところで同盟を結ぶには、清国なり韓国なりのお互いの利害のほかに、もう一つ GIVE AND TAKE 出来るものがなければなりません。実はそれが日本海軍だったのです。「日本の海軍は勝海舟が作り、山本権兵衛が育てた」と云われます。勝海舟は咸臨丸を指揮して太平洋を横断、幕府海軍奉行から明治新政府の海軍卿になり、いわば日本海軍のレールを敷いた人です。山本権兵衛は薩摩出身。十六歳で戊辰戦争に従軍しましたが、戦いが終わって江戸へ帰ってきてもすることがありません。このままでは食いはぐれると、体も大きいし力自慢だったので、相撲取りになろうと、薩摩藩のお抱え力士陣幕の門を叩きました。ところが「あなたみたいに頭の回る人は、相撲には向かない」と断られ、結局西郷隆盛の勧めで勝海舟の家に居候したことから、海軍に入ったのです。

その山本が「大佐大臣」と異名をとるほど、つまり階級は一介の海軍大佐なのに、大臣のように横暴だと、悪口の限りを浴びながらも実力を見せてくるのは、海軍官房主事、いまでいう官房長になった明治二十六年の頃です。海軍大臣は西郷隆盛の弟、従道でしたが、山本は「いざ戦いになって勝てる海軍にするには、海軍兵学校で基礎から教育を受けた、若くて有能な者をポストにつける以外にな

い」。こう云つて、年をとつた幹部九十七人の首切りを迫つたのです。薩摩出身者も多く、維新の功労者ばかりです。太つ腹で知られるさすがの西郷もひるんだそうですが、山本「功労者には勲章をやればよい。実務につけると百害を生む」と云つて、日清戦争の始まる前に海軍人事を一新してしまいました。

二十八年六月、三国干渉の直後ですが、山本は西郷の指示で新しい海軍のプラン作りに取り掛かることになつたのです。山本は考えました。極東で大きな海軍力を持っているのは、イギリスとロシアだけだ。だからイギリスかロシアに、もう一国か二国が連合したと仮定して、これに対抗出来る艦隊を作ればよい。そこから弾き出したのが、戦艦六隻、一等巡洋艦六隻のいわゆる「六六艦隊」です。しかも山本の戦略眼が優れていたのは、戦艦のうち四隻を当時では一番大きな一万五千トにしたことです。このクラスの戦艦は、水深の浅いスエズ運河を通れません。万一戦争になつてヨーロッパから極東へ持つてこようとすると、アフリカの喜望峰回りになります。この航路に石炭貯蔵施設を持つているのはイギリスだけですから、イギリスが中立を守れば、石炭の補給に困るに違いない。しかも山本は戦艦六隻は全てイギリスに発注し、いざという時イギリスを味方につける算段もしていたのです。事実、日露戦争はこの山本の読み通りになり、バルチック艦隊は半年がかりの喜望峰回りを余儀なくされ、しかも石炭の補給に苦しみ続けることになりました。

太平洋戦争で日本海軍は、この山本構想にあやかつて六万二千ト、四十六隻の大巨砲を積んだ巨大戦艦大和と武蔵を造りました。スエズ運河は水深が問題でしたが、今度は幅の狭いパナマ運河です。戦艦に四十六隻の大砲を積もうと思えば、横幅を大きくとつて安定させなければなりません。するとパナマ運河は通れないのです。アメリカは太平洋艦隊、大西洋艦隊と二つの艦隊を持つていますから、これをパナマ運河経由で有効に使おうとすれば、大砲は一回り小さな四十隻砲にするしかありません。日本はアメリカに対して大艦巨砲主義で優位に立とうとしたのですが、残念ながら海の決戦兵力は、戦艦から飛行機に移つていて、大和、武蔵は巨砲の威力を発揮しないまま沈んでしまいました。山本構想にしがみついたまま時代の推移を見落としていたこと、そして大西洋からいちいち軍艦を回すまでもなく、どんどん新しい軍艦を造つてしまふ、アメリカの工業力を見誤つていたのです。

山本権兵衛が海軍大臣になつたのは明治三十一年、四十五歳の若さでした。在任七年余りの長きにわたりましたが、一貫していたのは人事が公平で、人を見る目が確かだつたことです。山本は次官に四十一歳、大佐になつたばかりの齋藤實を抜擢しました。齋藤は後に首相となり、二・二六事件で暗殺された人ですが、齋藤の下の局長に少将、位でいえば上官が何人もいたと云いますから、能力主義以外の何物でもありません。山本は個性強烈、この人が座つただけで座敷は敵味

方に分かれたと云うくらい、力はあつたが敵の多い人でした。ところが斎藤はそんな山本とは対照的に、包容力と暖かい人柄で、意見の違う人からも愛されたと云います。まさに絶妙のコンビでした。無口で地味だが、闘志を内に秘めた東郷平八郎を連合艦隊司令長官に抜擢したのも、山本の優れた決断でした。

また山本の時代ほど、若い海軍士官が大勢外国に行つた時代はありません。日本海海戦で連合艦隊参謀として活躍した秋山眞之も、快速巡洋艦吉野を受け取りにイギリスへ行き、三十年六月にはアメリカへ留学しています。旅順口で戦死した軍神広瀬武夫中佐もロシア留学です。そしてイギリスなどで建造された「六六艦隊」の受け取りに、大勢の青年士官が外国へ行つたのです。皇太子妃雅子さんの曾祖父、後に海軍中将となる江頭安太郎大尉は、巡洋艦高砂の受け取りにイギリスへ行つています。じかに国際社会に触れて、外の空気を吸収する。云つてみれば、海軍が物の見方の広い人材を養成する、国際教育の場になつたのです。これも山本の大きな功績の一つであり、十五年前「定遠に勝てるかね」とからかわれた海軍は、人も軍艦も着実に力をつけていたのです。

さて、話を日英同盟に戻します。イギリスの閣議も、長年の孤立政策から踏み出そうというのですから紛糾しました。決め手になつたのは、海軍大臣が閣議に提出した覚え書きでした。当時イギリスが持つていた戦艦は四十五隻。これに対して同盟を組んでいるロシアとフランスは、合わせて四十三隻。ところが五年後には五十三隻ずつの同数になつてしまい、世界中が東になつてかかつてきても大丈夫だという、イギリス海軍絶対の時代は過ぎたと云うのです。しかも極東ではロシアが新しく造つた戦艦、巡洋艦を優先的に回しているので、ロシア・フランス連合の方が優位に立っています。

こうなると、日本の「六六艦隊」がどっちにつくかは、重大な意味を持つてきます。しかもそのほとんどを造つたのはイギリスですから、日本海軍が急速に力をつけてきたことは十分承知していました。実はこの日英同盟には、長いこと伏せられていた「海軍条項」と呼ばれる秘密協定がありました。お互いの海軍の便宜供与をうたつたもので、イギリス東洋艦隊にとつて日本のドックを利用出来ること、石炭供給は大きな魅力になつたようです。イギリスの大蔵大臣は、「この同盟でイギリス海軍の負担は軽くなる」との意見書を出し、こうしてイギリスの日英同盟の方向が決まつたのです。

問題は日本です。元老の伊藤博文と井上馨はロシアとの協調路線でしたが、イギリスが正式に同盟を提案してきた三十四年七月、日本の内閣は伊藤から桂太郎に代わつていました。実はその前年の暮れ、ロンドン・タイムズ北京特派員モリソン記者のスクープ記事に、日本政府は大きな衝撃を受けていたのです。それはロシアと清国の第二次露清密約と云われるもので、南満州を事実上ロシアの保護領とする秘密協定です。ですから桂は組閣にあたって、日本だけで極東の難局に

あたるのは無理だから、どこかヨーロッパの国と同盟することを大方針とし、出来ればその国をイギリスにしたいと思っていました。

この桂内閣と云うのは、それまでの内閣と違つて、元老が閣僚として一人も入っていません。そのため「二流内閣」とか「緞帳内閣」とか云われたように、どんちようの後ろに控える元老たちの同意を、どう取り付けるかが問題でした。何しろ桂がまだぺえぺえの陸軍大尉のころ、山県有朋はたつた五歳違いとはいえ陸軍中將、すでに陸軍のトップに立っていたのですから大変です。同じ長州の大先輩である伊藤や井上、山県の顔を立てながら、「調整の名人」と云われた桂の慎重な根回しが始まりました。伊藤や井上が心配したのは、イギリスとの同盟がロシアを敵に回すことになりはしないかということでした。桂は「同盟を結ばなくてもロシアはやってくる。日本は独力でも戦わなければならないのだから、イギリスが同盟してくれば、それだけ得である」。こう主張して、八月四日の元老会議で一応の同意を取り付けたのです。

林公使に対する政府訓令を自ら筆をとつて、巻紙にさらさらと書いたのは伊藤博文でした。「進みて英国政府の意向を審らかにせよ。今回協商の成否は一に貴官の注意と手腕に由るべし」。伊藤の余り望みをかけていない気持ちだが、最後の言葉にちらつている感じですが、桂首相が打電させた時その結びは、「同盟の成否は一に貴官の裁量と手腕とに俟つ」と変わっていました。注意が裁量に代わつただけでしたが、林は「この訓令に接した時ほど愉快を感じたことは、余の人生に絶えてなかつた」と話しています。林は、この佐倉で日本最初の私立病院佐倉順天堂を開設して、医学教育と医療を行なつた佐藤泰然の子供です。函館五稜郭の戦いで敗れ政府軍に捕われましたが、幕府時代のイギリス留学の経験を買われ外交官になつた人です。その林にとつて、自分の手で大英帝国との同盟をまとめることは、まさに男子の本懐、小躍りする気持ちだつたに違いありません。

ところが伊藤は、日英同盟は出来ればよいが、あの大英帝国が極東の小国日本と同盟するはずがない。出来つこないと思つていたので。ですから、アメリカのエール大学から名誉法学博士の学位を贈られる話が出ると、ついでにロシアへ行くと言ひ出したのです。伊藤はロシアと直談判した方が手っ取りばやいし、現実的だと考えていました。日英同盟を進めたい桂にとつては頭の痛い事態です。送別会の席で山県が「外交に独断専行は許されない」、つまり伊藤に勝手なことをするなと云えば、桂も「自分が内閣の首班である以上、やはり事の大小にかかわらずご報告頂きたい」とクギを差しました。「そんな小むつかしいことを云うなら、ロシア行きはやめにする」と駄々をこねた伊藤が、井上になだめられて横浜から出発したのが九月十八日です。清国公使だつた小村寿太郎が外務大臣に就任するため、東京へ帰つてきたのが翌日の十九日。伊藤とすれ違いのこのたつた一日の差が、日本の運命に決定的な影響をもたらしたと云う人もいます。伊藤に

会わずにすんだことで、元老という今では想像出来ないほど大きな存在の制約を全く受けず、小村は日英同盟に向かつて驀進することになります。

小村は就任早々真つ先に、電信課長の石井菊次郎にロシアとイギリスの外交史を調べさせました。二つの国がどのくらい信用出来るか、歴史から学ぼうというのです。ロシアは同盟を一方的に破つた点では、常習と云つてよいほどでした。これに対してイギリスは、一度結んだ同盟は常に誠実に守っています。小村は好き嫌いの感情ではなく、冷静な打算によつて、日英同盟が日本の安全にとつて最良の道であると結論づけ、林公使を全権に任命してイギリスとの条約草案の詰めにいらせたのです。

この間ロシアに入った伊藤は、ウイッテなどロシアの有力者に会つて、日露協商の道を探りました。満州は事実上ロシアが占領しているのだから、その自由は認める。代わりに韓国での日本の権利を認めてほしい。満州と韓国の「満韓交換論」と云われるものです。ところが、この時期の伊藤のロシア訪問です。イギリスは二股外交ではないかと疑い、慌てた日本政府は「伊藤は個人の資格で行つてゐるのだ」と弁解しましたが、結果的には伊藤のロシア行きが、大詰にきてもたついていたイギリスを、一気に同盟に踏み切らせる効果があつたようです。

日本の最終態度を決める元老会議は、明治三十四年十二月七日に開かれましたが、伊藤からは「日英同盟調印を延期せよ」との電報がきていました。そして日露協商を強硬に主張する井上の前に、小村がドサリと投げ出したのが、これまでの交渉経過の書類の束でした。それらの書類は、日英交渉がもう引き返せない所にきてゐることを雄弁に語つていました。井上もついに沈黙し、有名な小村意見書が同盟を決めたのです。

小村は日英同盟が必要な理由として、三つの点を挙げています。まず第一に、イギリスは東洋の現状維持を国策としてゐる。ということ、侵略的なロシアと手を握るより各国の支持、ことに清国の理解、協力が得られる。第二に、イギリスは世界一の通商国だから、イギリスと同盟すれば、財政、通商上の利益が大きい。第三に、世界の信用も得られる。第三に、軍事上の利益が大きい。ロシアと結べば日本の軍事目標はイギリスとなり、イギリスに対抗する海軍を持つには膨大な金がかかる。これに対してロシアを敵にしても、ロシア艦隊は旅順、黒海、バルチック艦隊と三つに分散してゐるから、日本は順次これを各個撃破していけばよい。この小村の判断がいかに正しかつたかは、日露戦争の経過がはつきり証明しています。イギリス公使林董はその回顧録で、「小村は井上を顧みず、伊藤をも恐れず、二人を無視して自分の所見を断行して動かなかつた」と称賛しています。日英交渉の小村こそは、小村外交の真骨頂だつたと云つていいでしょう。

こうして三十五年一月、日英同盟は調印されました。内容は、日本がロシアと戦争になれば、イギリスは中立を守る。もしフランスとかドイツがロシア側に加

われば、イギリスも日本側に立つて戦う。フランスやドイツを牽制した防衛同盟で、期間は五年でした。これが日本が戦争になれば、イギリスも自動的に参戦する攻守同盟となるのは、日露戦争中の三十八年のことで、期間も十年に延長されました。

さてこの時期、後に満鉄となる東清鉄道南部支線が開通しました。日英同盟が圧力になって、一度は満州撤兵を約束したロシアですが、逆にこの鉄道を使って大軍を続々と満州に送り込んできたのです。しかも鴨緑江にまで進出し、韓国領内に陣地を築き始めたので、日本としても黙っているわけにいきません。ところがロシアの方は、日本は押せば引つ込む。日本から戦争を仕掛けてくるとは、思つてもいなかつたのです。ニコライ二世は「戦争はない。何故なら自分がまだ戦争を望まないからだ」と云っています。東清鉄道は開通したといつても、まだ単線です。戦争を始めるのは、軍隊も物資も大量に送れる複線になってからだとうのです。ロシアの日本公使ローゼンも、本国政府にこんな報告をしています。

「日本の内政外交は、元老の同意がなければ何も行なわれない。総理大臣といえども、元老の意に反しては何も出来ない。そして元老たる三、四人の者は、功なり名を遂げて年もとっているのです、この期に及んで一国の安全を賭してロシアに戦いを挑んだりすることは、万に一つもないだろう」。

この時の元老は長州が伊藤博文、山県有朋、井上馨、薩摩が松方正義、大山巖の五人です。確かに伊藤や井上はロシアを恐れ、少々譲つてでも和解の道を探ろうとしました。だが元老たちに共通していたのは、国際社会の荒波の中で、日本をどうやって生き延びさせるかということです。彼らは日本の実力について、常識的な判断を持つていました。甘い期待もなければ、思い上がりもありません。だからこそ、出来ることなら戦争を避けたいと、ギリギリの努力をしたのです。

日本政府が最終的に日露開戦の決意を固めたのは、三十六年十二月十一日のロシア側回答だつたと云われます。それは朝鮮での日本の軍事的利用の禁止と、北緯三十九度以北を中立地帯とすること。満州については、当然だといわんばかりに一言も触れていませんでした。中立にするといつても、隣まで軍隊を進めていくロシアが、それを自分の物にするのは火を見るよりも明らかです。アメリカの日本公使は本国政府に、「日本が偉大な節度と忍耐を行使してきたことは、当地の公平な観察者全員の見解である」と報告しています。

実は日本の外交努力が国際世論を味方に出ることが出来たのは、外務省顧問ヘンリー・デニソンの力も大きかつたのです。明治維新というのは、云つてみれば青写真なしの革命でしたから、「文明国家になるには欧米に学べ」と、大勢のお雇い外国人を招きました。今の外人助っ人はプロ野球とサッカーですが、明治新政府が招いたのは、政治、外交から農業、教育、医学、芸術とあらゆる分野にわたりました。明治五年にアメリカの横浜総領事として来日したデニソンが、外務

省に入ったのは十三年ですが、石井菊次郎が「天が日本の外交に幸いして天下らせた」と絶賛したほど、明治の日本外交の指南役でした。大臣の小村の年俸が六千円なのに、デニソンは一万円の高給取りだったそうです。

そのデニソンは、小村からロシア宛て外交文書の執筆を命じられ、一晩考えても考えがまとまりません。翌朝小村の所へやってきたデニソンは、「止むを得ない場合は、戦争をも辞さないとの覚悟をお持ちなのですか」と尋ねました。「もしその覚悟があるのなら、特に温和な文章にすべきだし、戦争を絶対に避けたいのなら、威嚇するためにも強い語調にした方がよいでしょう」と云うのです。小村は「交渉次第だ」と簡単に答えただけでしたが、デニソンは小村の戦争決意を感じ取り、温和な文章で作成したと云います。開戦後こうした外交文書が世界に公表され、日本の平和努力を世界に印象づけると共に、日本への同情を集めることにもつながったのです。

こうして三十七年二月四日の御前会議で日露開戦が決まりましたが、明治天皇が宣戦の詔勅に御璽を捺される時、手が震えてなかなか紙の上に捺せません。海軍大臣山本権兵衛が天皇の右手をしつかり押さえて、やっと捺することが出来たと云います。天皇の気持ち全てを物語っています。超大国ロシアはそれほど怖かったし、責任ある立場なればなるほど、薄氷を踏む思いの戦いだったのです。

山本海軍大臣は出先の艦隊司令長官、司令官あてに、開戦にあたっての訓示を打電させました。電文にはこうあります。「わが軍隊の行動は常に人道を逸するが如きことなく、終始光輝ある文明の代表者として恥ずる所なきを期せられむこと、本大臣の切に望む所なり」。いいですね。海軍大臣が「勇戦奮闘を望む」ではなく、人道を外すな、文明の代表者として恥ずかしくない行動を取れ。実はこの「文明」というテーマこそ、条約改正に苦闘した日本が、常に心がけてきたことだったのです。日清戦争の時も、大山巖が第二軍司令官として出征するさい、「わが軍は仁義をもって動き、文明によって戦うものなり」と訓示しています。外国と対等になるには、欧米の物差しである文明国家になり、そして何よりも欧米からそう認められないといけなかったのです。

外交とは「異なる価値観と利益の調整だ」と云われますが、日露戦争の勝因の筆頭に挙げられる日英同盟を振り返ってみる時、一層その感を強く致します。エツカルトシュタインという思いもかけなかった仲介役が、ドイツから現われたこと。遠く離れた南アフリカのボーア戦争で、イギリスにとっても同盟の必要性が出てきたこと。日清戦争が終わった時の二流海軍が、「六六艦隊」の一流海軍に整備され、イギリスにとって孤立政策の放棄に値する力になっていったこと。この話が具体化した時、日露協調派の伊藤内閣から日英同盟派の桂内閣に代わって、小村寿太郎という冷静な判断力を持った外務大臣が登場したことも幸いでした。

そしてもう一つ忘れてならないのが、明治三十三年の義和団事件の際の日本軍の活躍でしょう。北京の各国公使館が義和団に包囲された時、籠城戦の指揮をとったイギリス公使マクドナルドを助けたのが、公使館付武官の柴五郎陸軍少佐でした。その見事な活躍ぶりはモリソン記者によって大きく報道され、「Major Shiba」の見出しが連日ヨーロッパの新聞を飾ったのです。日本公使館には海軍から二十四人の警備兵が派遣されていましたが、戦死五人、負傷十四人と云う数字が戦闘の激しさを物語っています。ロンドン・タイムズは社説で「日本人ほど男らしく奮闘し、その任務を全うした国民はない。日本兵の輝かしい武勇と戦術が、北京籠城を持ちこたえさせた」。こう絶賛していますが、イギリス国民の間に親日世論を生むことになりましたし、やがて日本公使になったマクドナルドも日英同盟を強力に推進したのです。

列強諸国は連合軍を編成して北京を解放しましたが、ロシアをはじめ各国軍隊の掠奪暴行が横行した中で、一万三千の日本軍は規律正しく勇敢でした。当時北京にいたイギリス人看護婦は、「絶対と云っていいほど信頼出来たのは、日本軍だけだった」と云っていますし、「日本軍管轄地域なら安全だ」と、大勢の中国人が保護を求めて流れこんできたほどでした。掠奪を免れるため、多くの民家との間に賠償交渉がまとまった時も、日本は連合軍兵力の六割近くを送っていないながら、その金額はロシアの四分の一、ドイツの三分の一、フランスの二分の一と控え目なものでした。外交には、こうした信頼の積み重ねが大きかったのです。

小村がこの日英同盟で確立しようとしたのは、主義、原則の外交でした。そしてそれを支える信頼があったからこそ、出来た同盟なのです。石井菊次郎は「外交に指南書があるとすれば、それは歴史であり外交史である」と云っています。日本は大正時代までは、条約を守ると云う点では優等生の国でした。それは条約改正の苦勞を、リーダーたちが骨身にしみ込むほど感じていたからなのです。それが昭和に入ってから、陸軍が政治も外交も押し退けて出てくるようになり、日本の外交から一番の基盤である信頼が失われていったのは、大変残念なことだったと思います。